

千里山花壇の設計図について

はじめに

現在、関西大学第一中学校・第一高等学校や幼稚園、関西大学会館、第3学舎が建ち並ぶエリアが、かつて「千里山花壇」や「千里山遊園」と呼ばれた遊園地であったことは、すでに年史の刊行物や関西大学通信等の記事において、よく知られている。千里山花壇は、戦前期には桜の名所として知られ、終戦直後には枚方で開催できなかった菊人形展を開催したこともあり、北摂の行楽地として親しまれていたようである。当時の広告のイラストマップや写真から、当時の雰囲気はおおよそ分かるが、正確に施設の内容や規模、配置がわかる配置図や設計図はほとんど見られない。本稿では、京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の椎原兵市コレクションに含まれている2枚の千里山花壇の設計図と、昭和初期の拡張時に描かれた「千里山花壇俯瞰図」を取り上げ、戦前期の千里山花壇の園内の様子を明らかにする。

橋寺知子

1. 千里山花壇・千里山遊園の沿革^①

現在の阪急千里線は、1918（大正7）年に発足した北大阪電気鉄道が敷設したもので、1921（大正10）年4月に十三―豊津間、同年10月に豊津―千里山間が開通した。1923（大正12）年に北大阪電気鉄道は、1922（大正11）年に発足した新京阪鉄道に事業を譲渡する契約を結び、同年4月からは新京阪の千里山線として営業開始となった。1925（大正14）年には天神橋―淡路間が開通し、大阪中心部から直接乗り入れられるようになった。1930（昭和5）年には新京阪は京阪電鉄と合併、さらに戦時中には京阪電鉄と阪神急行電鉄（阪急）が合併して京阪神急行電鉄となり、現在の千里線の運営会社は目まぐるしく変化した。

千里山花壇は、1920（大正9）年、北大阪電鉄が開設したものである。さらに、1926（大正15）年3月から、新京阪電鉄によって7万円を投じて再整備され、1927（昭和2）年5月に完成し、桜の名所として有名になった。1931（昭和6）年には牡丹園が設

置され、また1937（昭和12）年11月には京阪電鉄によって隣接の社有地が拡張整備され、1939（昭和14）年2月に完成、広さは倍になった。1938（昭和13）年に名称が千里山花壇から「千里山遊園」に変わったが、戦時下の状況を反映して、ほどなく「千里山厚生園」となった。戦後、枚方で開くことができなかった菊人形展を1947（昭和22）年、48年に開催したが、49年には枚方パークが復活し、1950（昭和25）年5月に千里山遊園は閉園となった。宗教法人聖母奉献会に一旦売却されたが、学校法人関西大学が取得し、幼稚園や第一中学校、第一高等学校、大学本館、第3学舎等が徐々に建設され、現在に至る。

表1 千里山花壇の変化

1920（大正9）	千里山花壇 開設（面積：46,200m ² ）
1927（昭和2）	再整備完成
1931（昭和6）	牡丹園設置
1938（昭和13）	千里山遊園に名称変更
1939（昭和14）	面積約90,000m ² に拡張整備
1950（昭和25）	閉園、売却

2. 椎原兵市コレクション所収の2枚の千里山遊園設計図

椎原兵市（1884～1966）は、1907（明治4）年に京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）図案科を卒業し、宮内省内苑寮・内匠寮の技師として、御用邸や京都御苑の宮廷庭園、伊勢神宮等の外苑の設計を担当した^②。その後1920（大正9）年、大阪市都

市計画部に奉職、1924（大正13）年には土木部初代公園課長となり、大阪市の公園緑地計画の基礎を築いた。大正中期以降の大阪市の公園計画を強力に推進した人物で、昭和御大札記念事業として実施された大阪城公園（1931年開園）は椎原の設計による。また1937（昭和12）年に完成した御堂筋の街路樹を東洋的なイチョウに決定したのも椎原であり、大阪の特色ある緑地空間を創出した人物と言える。京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、椎原兵市コレクションとして、椎原の描いた設計図等が収蔵されている。その中に2枚の千里山花壇に関連する資料が含まれている。本章ではその2枚の図面に描かれている内容を整理する。

2-1. 「千里山花壇改修計画平面図」

（No.4825-14）（図1・巻頭カラーグラビアにも掲載）

美しく着色された園地全体の配置図で、右下に「H. Shinara」というサインと「15:1.10」と記されている。この数字は、「大正15年1月10日」と推測される。園内の園路や施設、植栽の様子が丁寧に描かれており、建物は赤茶色に着色され、施設名がそれぞれ添えられている。千里山花壇の大きな特徴は、起伏のある地形であり、等高線も点線で描かれている。

鉄道の停留所前に正門があり、その東側には「児童園」が、敷地の起伏に従い、3段に分かれて計画されている。「徒渉池」と名付けられた池やすべり台などの遊具がある。「猿」や「小鳥舎」、「孔雀舎」、「カワウソウ鵜」等、動物が飼われ、また「龍宮」や「猿蟹」、「花咲爺」、「雀ノお宿」など、おとぎ話に題材を得た施設も計画され、子ども向けの

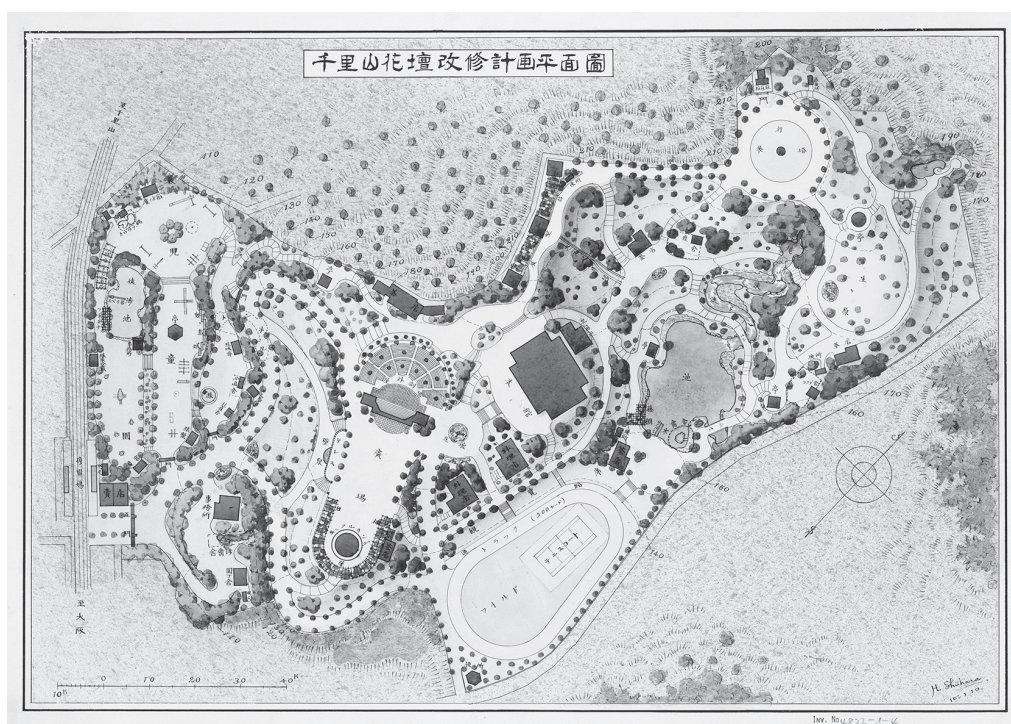


図1 千里山花壇改修計画平面図

楽しい空間が計画されている。中腹には「野外劇場」と書かれた半円形の客席と舞台となる建物があり、その南側には大きな「広場」が設けられ、「サークルリング」と「日陰棚」が配され、西洋庭園の定型とも見える左右対称の象徴的な場所となっている。野外劇場の北側にはかなり大きな面積をもつ「本館」があり、このエリアは園の中心部として計画されたと考えられる。その東側には敷地形態の制約を受けたためか、卵型のイレギュラーな形の「トラック」、「フィールド」、「テニスコート」が配されている。園の北部は、園内で一番高い所であり、北西角に「飛行塔」、西側の敷地境界に沿って、正方形の建物が3つ並ぶ「展望台」がある。その東側には敷地の高低差を利用して「滝」、「溪流」、「池」が計画され、橋も架けて変化のある園路が巡らされている。園内には、円形や四角形、六角形などの「亭」や「便所」が適所にあり、「料理店」や「茶店」も複数設けられている。

椎原兵市は、『庭園と風景』1927年5月号に「千里山遊園地の改修設計」と題した論文を執筆し、この「千里山花壇改修計画平面図」を挿絵として掲載している。したがって、この設計図は、論文の掲載年から考えて、1927（昭和2）年に完了した再整備時の計画図と考えられる。この論文で椎原は、計画の要点を園路、小供園、運動場、池及流、野外劇場と広場、展望台、本館敷地、排水設備、植樹と芝生、其他、に分けて述べている。「小供園は本園の最も特徴とする施設の一として計画せり」、「地勢の関係より上、中、下の三区に分ち、上段の地区には主として小鳥、鳩、孔雀、水禽、猿等の各種動物舎を配置し、中段の地区には既設の運動具の外、更に危険の憂無き珍らしき数種の器具を増設し、下段の地区には百五十坪の徒渉池を作り（中略）、各段

を通じ童話を題材とせる五ヶ所のお伽の家並びに休憩所、花壇を作るものとす」、また「本園が庭池を設くるに最も好適の地形を有するに現在水の美観を欠けるは、蓋し水源を有せざるが為ならん（中略）、今回の改造を好機に瀧を設け溪流を築き、池を穿ちて面目を一新することとせり」と述べている。小供園が計画された場所は、現在、関西大学幼稚園の校舎や園庭がある場所、段状になった校舎裏側の園庭で園児たちが地形を体感しながら遊んでいる様子を見ると、往時の様子が重なるように感じられる。

2-2. 「千里山花壇平面図」(No.4833-23) (図2)

こちらは青焼きの図面で、日付の記入がない。詳細に描かれた部分の園路やおおまかな構成は、「千里山花壇改修計画平面図」と同様であるが、正門東側で線路の敷地が園地として含まれて、「売店」や「山羊舎」「噴水」の記入があり、噴水の周囲には楕円形で3列の植栽や藤棚のような表記がなされている。

この部分の北側や東側に、「他人地」や「牡丹園」という表記があり、鉛筆でその部分に着色がなされたり、等高線が書き込まれたりしている。この点から、1939(昭和14)年に完成をみる千里山花壇の園地拡大に先駆けて、その計画段階で作成されたものと考えられる。

線路に沿った西側にも多少拡張され、「菊栽培場」という表記が見られる。児童園の部分では、動物の種類が若干異なるものの、円形の猿舎、鳥舎や水禽など特徴的な動物舎は、「千里山花壇改修計画平面図」と同じである。中心部の野外劇場は、形態は同じだが、建物部分の表

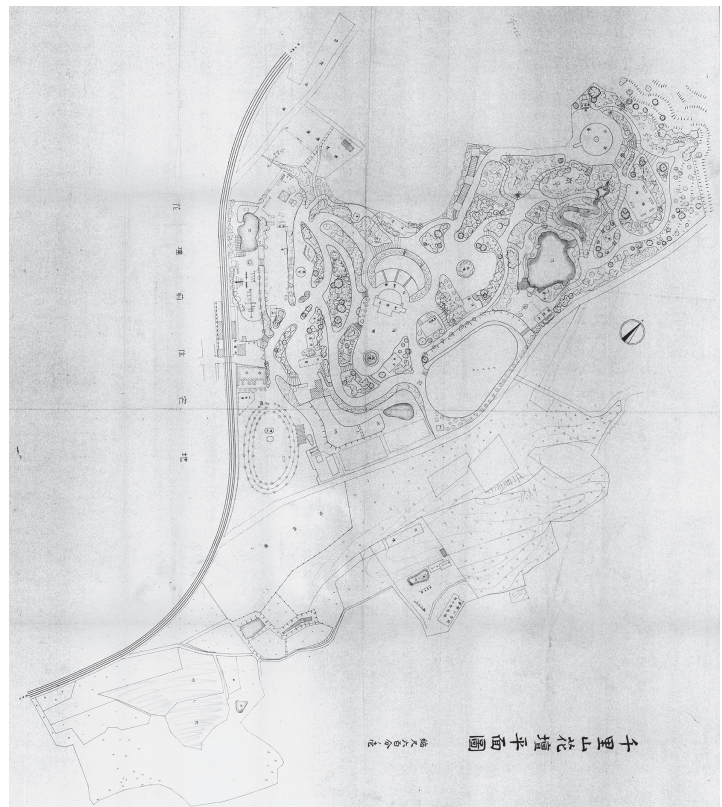


図2 千里山花壇平面図(方位を図1とあわせている)

記は「音楽堂」となっている。サークルリングは「花壇」に変わっているが、形は円形である。「千里山花壇改修計画平面図」に描かれていた本館は見当たらず、円形の「花壇」が中心にある空地となっている。北部はほぼ「千里山花壇改修計画平面図」と変わらない。

前節の「千里山花壇改修計画平面図」は、計画時のものであり、そこに描かれたものには実現されなかったものも含まれていると推測で

きる。本節の「千里山花壇平面図」に描かれている千里山花壇は、1939（昭和14）年の拡張前の施設の実像を示していると考えられる。

3. 関西大学年史編纂室所蔵「千里山花壇俯瞰図」

（図3・巻頭カラーグラビアにも掲載）

関西大学年史編纂室でも千里山花壇の資料の収集に努め、近年得られた資料として、京阪電車が発行した千里山花壇のパンフレット^④がある。「二倍に廣くなった千里山花壇 お子達の遊園地」と題された冊子は、作成年代が明記されていないが、1939（昭和14）年に千里山花壇が拡張された時に作成された広告物と考えられる。この冊子に見開きで「千里山花壇俯瞰図」と題されたイラストマップが掲載されている。このイラストは、線路側から眺めた鳥瞰図風であり、施設の正確な位置や規模は判断できないが、前章で述べた2枚の図面と比較しつつ、解説を試みる。

冊子の記述によれば、この拡張により園地は倍増し、新しくできた施設として、「沈床花壇」、「大運動場」、「花壇」、「遊技場及乗物園」、「展望所」が列挙され、加えて「百坪の食堂」が建設予定と記されている。新施設に挙げられている沈床花壇は、「千里山花壇平面図」で新たに描かれていた、正門東側の噴水を中心とした楕円形の植栽の部分にあたり、「中央部に噴水台を設け縦横に園路を通し之を四区に分ちきりしま（ツツジ）ツゲ、貝塚、千手蘭等を植栽し周囲道路沿柵垣には「クライミングローズ」を植付く」と記されている。その東側の大運動場は直線100m、トラック200mで、スタンドに5000人、周囲の芝生で5000人、計1万人を収容できると言う。卵型の旧グラウンドがあ



図3 千里山花壇俯瞰図

った所は、「運動場」という表記に変わり、その南側、以前は「他人地」であった所に「遊技場」ができています。遊技場にはぶらんこやすべり台らしきものが描かれており、遊技場を取り囲むように「乗物園」があり、外側から三重に「汽車道」、「自動車道」、「乗馬道」に分かれている。拡張された区域の北方最高の場所、旧グラウンドの東側に「展望台」が設けられ、「花壇前停留所より高さこと約二百尺」とある。イラストでは、食堂として赤い屋根の建物が描かれているが、「食堂（予定）」と付記されている。

北部にあった池は「ボート池」と名前が変わっている。池へ注いでいた溪流や上流の滝は、あまりはつきりとは描かれていないが、冊子の他ページの挿絵には滝を描いたものが含まれているので、滝もそのままあったのだろう。新設の展望台からの見晴らしについて述べている部分で、「此の丘陵の終る處松林に蔭現する白壁の大殿堂こそ関西大学の校舎」と、隣接する関西大学にも言及している。

このイラストマップに描かれている千里山花壇は、戦後、関西大学が取得し、外苑と呼んできた範囲と一致する。

おわりに

今回取り上げた3枚の千里山花壇の設計図やイラストマップと、現在の状況を比べてみると、地形の状況、園路の配置などは、今でも千里山花壇時代の骨格を保っている。また千里山花壇時代のグラウンドや遊技場の形態・配置は、関西大学が取得してからの施設配置や建物のデザインに影響を及ぼしている。今後も引き続き、関西大学取得以降に建設された施設群との関連を探っていきたいと考えている。

注

- (1) 本章の記述は、京阪電鉄および阪急電鉄の社史に多くを負っている。京阪電気鉄道株式会社史料編纂委員会『「鉄路五十年」京阪電気鉄道、昭和35年、京阪電気鉄道』『京阪70年のあゆみ』、京阪電気鉄道、昭和55年、京阪電気鉄道』『京阪百年のあゆみ』、京阪電気鉄道、2011年、茂原祥三『京阪神急行電鉄五十年史』、京阪神急行電鉄、昭和34年
- (2) 高橋宏樹、宮城俊作『「椎原兵市の遺した図面からみた戦前の造園設計における平面図の意味と役割」、『ランドスケープ研究』63(5)、pp.753-758、2000年
- (3) 椎原兵市『「千里山遊園地の改修設計」、『庭園と風景』1927年5月号、pp.114-117、1927年
- (4) 京阪電車『二倍廣くなった千里山花壇 お子達の遊園地』、発行年不明。表紙等を含めて8ページのパンフレット。

(はしてら) ともこ・関西大学環境都市工学部准教授